

H O T 患者の現状と課題

～ 社会・心理的現状の調査から ～

THE PRESENT CONDITIONS AND SUBJECTS OF PATIENTS WITH HOME OXYGEN THERAPY

西 8 階病棟：伊藤喜世子・塩原まゆみ・小野千恵子

要 旨

当院において、はじめて H O T 患者の社会・心理的現状を調査した。調査結果において H O T 患者は、家族の理解・協力を得て生活していた。しかし、家庭外での活動への参加が、まったくないが過半数を占めた。また、家族以外の協力者も非常に少なかった。

さらに、酸素吸入をしている姿を見られたくないと感じた患者に、積極的に生活をエンジョイしている者はいなかった。女性患者にはその傾向が強く、H O T によるボディイメージの障害の存在が推察された。

これらにより H O T 患者に対して、社会・心理的なサポートシステムの必要性が示唆された。

キーワード

H O T 患者、ボディイメージ、サポートシステム

1. はじめに

近年、在宅酸素療法（以下 H O T と略す）患者は、増加の一途をたどり、それにともない、さまざまな問題が生じている。江頭¹⁾は、H O T 患者の社会的ハンディキャップや心理的問題の存在を指摘し、それを把握することの必要性を述べている。当院においても H O T 患者を対象とした社会・心理面での調査は今まで行っていなかった。そこで、今回はじめて調査を行い、若干の考察を加えたので報告する。

2. 研究目的

当院の H O T 患者の社会・心理的現状を把握し、今後の課題を明らかにする。

3. 研究方法

- (1) 期間：平成 8 年 7 月から 8 月
- (2) 対象：当院第 1 内科外来に通院中の H O T 患者 32 名（男性 26 名、女性 6 名）
- (3) 方法：江頭らによる厚生省呼吸不全研究班作成の調査用紙 C 改訂版を使用した、研究者 3 名による面接法

4. 結 果

(1) H O T の現状

対象患者全員の回答を得た。患者の平均年齢は 68.9 歳で、最高齢は 81 歳、最年少は 41 歳であった。

原疾患は、肺気腫19名と最も多く、次いで肺結核後遺症が7名であった。他は、悪性疾患の肺転移や心疾患・睡眠時無呼吸症候群などであった。

HOT導入してからの期間は、1年未満と1年から3年未満、および3年から5年未満がそれぞれ25%前後を占めた。10年以上は1名であった。(図1)

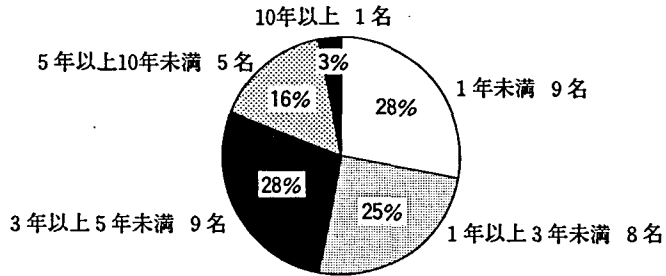


図1 HOT導入からの年数

32名中、医師より1日20時間以上の吸入指示を受けている終日吸入は22名であった。しかし、実際終日吸入しているのは17名であった。(図2)

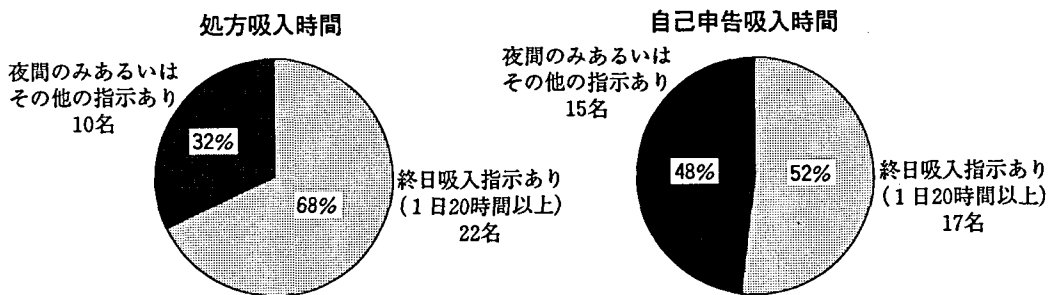


図2 処方吸入時間と患者の自己申告吸入時間

(2) 同居家族、他の協力者

家族構成は、配偶者と2人暮らしが15名と全体の約半数を占めた。(図3)

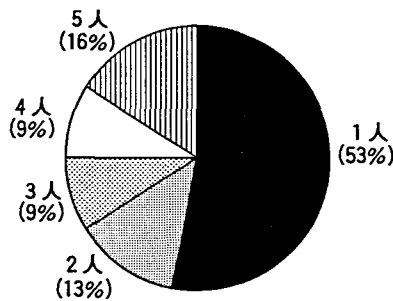


図3 同居家族

全体として、家族が面倒をみてくれないと答えたのは1名のみで、ほとんどは、家族がよく面倒をみてくれる、あるいは体調の悪いときや頼んだときに助けてくれると答えている。(図4)

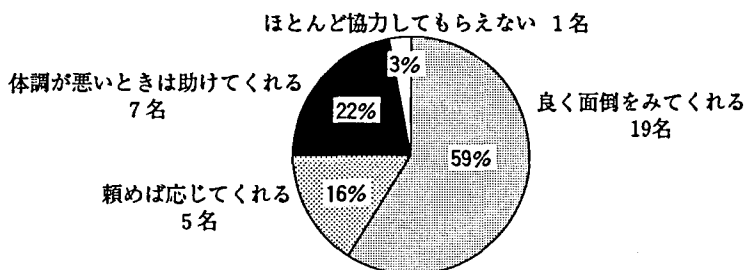


図4 家族の協力状況

しかし、家族以外の協力者がいると答えたのは2名のみであった。うち1名は訪問看護を受けていた。(図5)

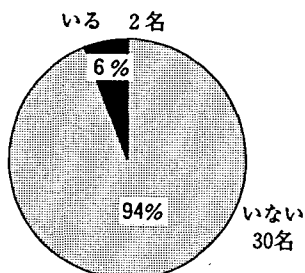


図5 家族以外の協力者

(3) 生活行動範囲

日常生活においては、外来通院以外ほとんど家屋内で過ごしているのが5名で、27名は散歩や買い物・会合や旅行への参加などで外出していた。これは全体の84%であった。(図6)

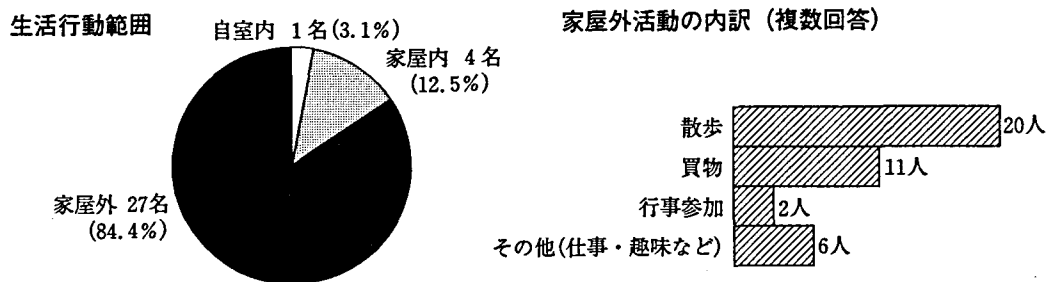


図6 生活行動範囲

また、通院以外の外出に利用する乗り物は、自分で車を運転をするのが13名、バイクは8名、自転車は6名が利用していた。(図7)

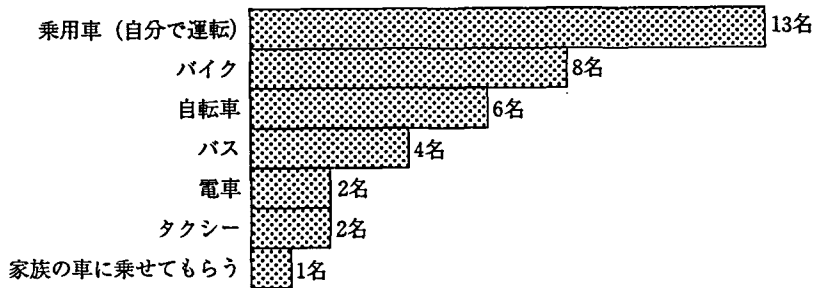


図7 通院以外の外出時に利用する乗り物 (複数回答)

1泊以上の旅行は、11名がしていた。しかし、旅行したいけれども酸素をしているから、あるいは疲れてしまうからできないと9名が答えていた。(図8・9)

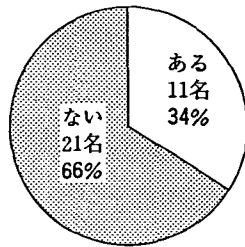


図8 1泊以上の旅行経験

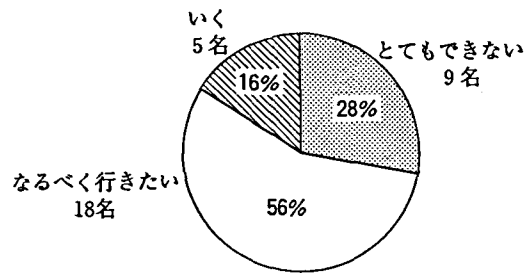


図9 今後も旅行に行くか

(4) 日常生活

身の回りのことは、ほとんどの患者が自分でしていた。(図10)

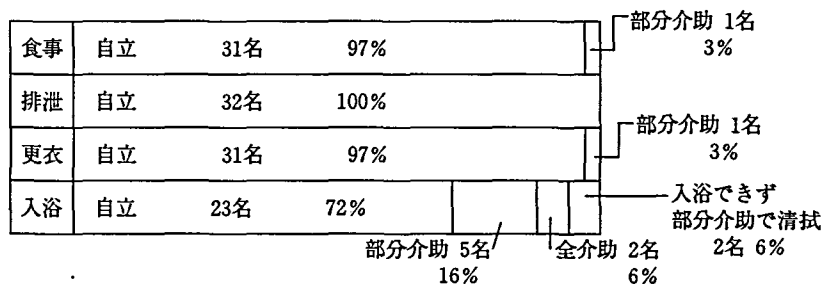


図10 日常生活行動

(5) 社会活動

家族との対話が多くあると答えたのは、27名であった。日常生活に対する積極的な気持ちは20名があると答えている。しかし、地域への参加の面では、まったく参加していないが22名となっていた。(図11・12)

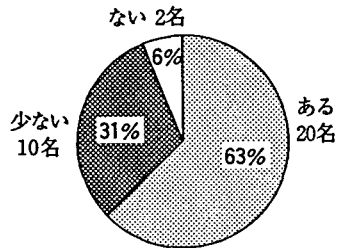


図11 日常生活への積極的な気持ち

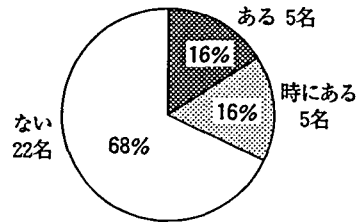


図12 地域活動への参加状況

仕事をしているのは、5名。仕事の内容は、非常勤や相談役がほとんどであった。4名が酸素吸入しながら働き、職場の理解がよいと答えたのは3名であった。

家庭での役割があると答えたのは、15名。役割の内容は、炊事・洗たく・掃除や子守り、あるいは花木の世話・犬の散歩・田んぼの水を見に行くなどがあげられた。

また、収入の面では年金がほとんどであった。(図13) 生活費は一応充足しており、やや不足していると答えたのは2名のみであった。

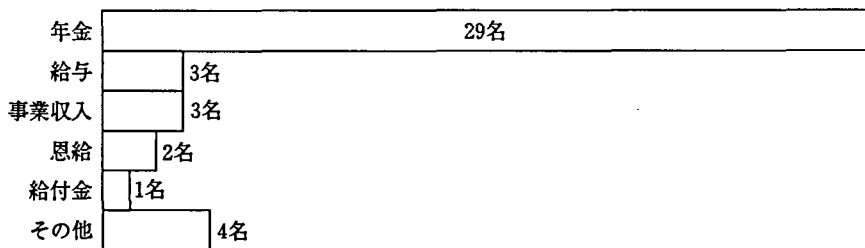


図13 収入の内容 (複数回答)

悩みについては男女とも半数があると答え、全体のうち7名が体調の不良や余病の可能性・老後の生活に対する不安をあげていた。生きがいがないと答えたのは7名で、うち女性2名であった。残りは俳句・絵画・園芸・写真・楽器演奏などの趣味や子供や孫の将来を生きがいとしてあげていた。(図14)

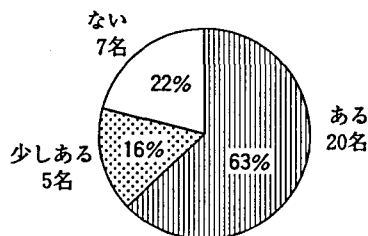


図14 生きがいの有無

全体として、日常生活に関しては満足しているが18名、不満だが入院はしたくないが14名であった。入院した方がよいは、まったくいなかった。(図15)

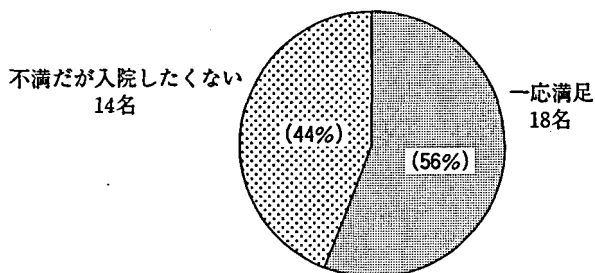


図15 H O T 施行前と比べた現在の生活の満足度

(6) 酸素吸入に関する患者自身の印象および心理的側面

吸入をできればやめたいと考えている患者は5名、必要ならば仕方がないが11名であり、ずっと続けたいは、16名と半数であった。(図16)

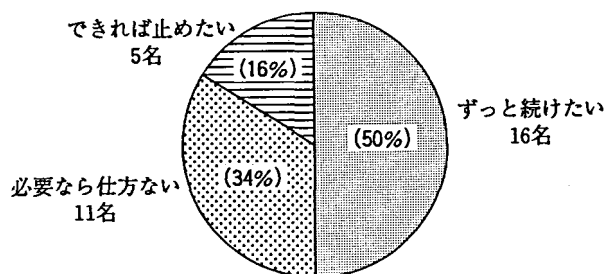


図16 酸素吸入を今後も続けることについて

酸素をしているところを人に見られるのが気にならない、と答えたのは21名、見られたくないは7名、少し恥ずかしいが4名であった。(図17)

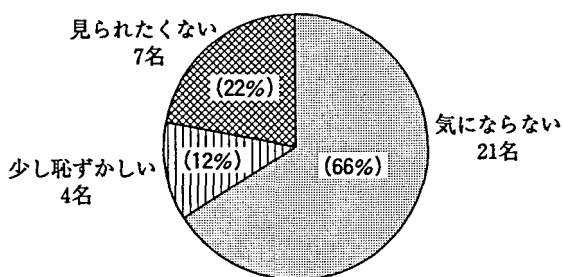


図17 酸素をしているところを人に見られることについて

うち女性患者6名では、見られたくないが5名、すこし恥ずかしいが1名であった。また、女性患者は酸素をしているとおしゃれができないと悩んでいた。

全体として、HOTによってそれなりに日常生活を送っているものが19名、導入前と比べ、消極的になっているものが5名、積極的に過ごしているものが8名であった。(図18)

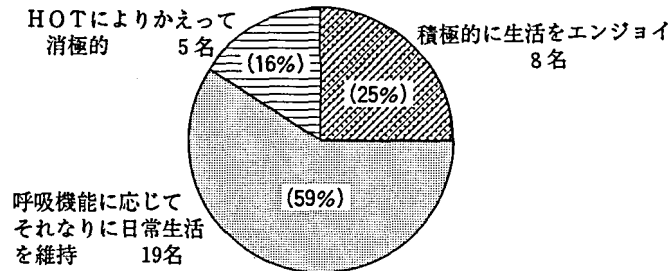


図18 患者に対する総合評価

積極的に過ごしている者のうち、7名は吸入しているところを見られても気にならないと答えている。女性においては、それなりが5名で積極的に過ごしているものは、なかった。

吸入しているところを見られても気にならないと答えた患者21名のうち、ずっと吸入を続けたいと答えたのは、14名と全体の3分の2を占めた。さらに積極的に生活をエンジョイしているものが、8名であった。(図19)

吸入を続けたいか	ずっと続けたい	14名	67%
現在の生活への満足度	一応満足している	14名	67%
積極的に生活をエンジョイ	している	7名	33%

図19 吸入をしている姿を見られても気にならない患者(21名)のHOTに対する考え方

しかし、吸入している姿を見られたくないと答えた患者7名のうち、ずっと吸入を続けたいは、1名のみであった。生活に一応満足しているは、2名。積極的に生活をエンジョイしているものは、まったくいなかった。

5. 考 察

- (1) H O T患者は、家庭内でのコミュニケーションは多く、家族の理解・協力は得られて、生活していた。また積極的な気持ちも約3分の2が持っていた。しかし、外出はしても家庭外での活動への参加は少なく、家族以外の協力者を得ている者は、わずかであった。これらの結果より、家族のみでなく、患者を支える社会的なサポートシステムの整備と充実が必要である。
- (2) A D Lは、保たれている者がほとんどであった。
- (3) 職業に従事している者は、江頭らの調査とほぼ同率であった。生活費は、一応充足しているが、ほとんどが年金生活者であり、高齢者が多いことを考慮すると楽観視はできない。
- (4) 医師からの吸入指示と実際の吸入状況には、ずれがあった。この結果より、現在行われている患者教育の他に、患者ごとの継続教育の必要がある。
- (5) 今回、吸入しているところをみられても気にならないと答えた患者には、酸素を続けたいと考える者が多く、現在の生活にも満足している傾向があった。また、積極的に過ごしている患者は、吸入している姿をみられても気にならないがほとんどであった。

しかし、女性患者は、吸入しているところを見られくれないと思っており、吸入もやめたい・仕方がないと考えている者が多く、積極的に過ごしている者はいなかった。これらより、女性患者には、H O Tによるボディイメージの障害の存在が推察された。

全体として、吸入している姿を見られたくないと考えている患者には、積極的に過ごしている者はまったくいなかった。江頭の調査では、H O T患者の過半数が神経症的傾向を有する²⁾と指摘されている。以上より、H O Tに対する受容の程度が患者のQ O Lに影響を与えている。

6. おわりに

今回の調査を通して、H O T患者の社会・心理的状況の概要を知ることができた。今後の課題としては、患者教育の充実のみでなく、患者や家族の不安や悩みを軽減できるようなサポートシステムの必要性を痛感した。

参考文献

- 1) 江頭洋裕：慢性閉塞性肺疾患患者のQ O L. The Experiment & Therapy, No. 631. 19-21. 1993.
- 2) 江頭洋裕：在宅酸素療法患者の心理社会的側面. 内科. 71(4). 740-743. 1993.